

THE WRITER WHO NEVER WROTE

Ferdinando Frega - Nando the Scribe



GILLETTE：一度も書かなかった作家

私が最初に理解したことのひとつは、出版ビジネスが純粋なナラティブをそっとしておくはずがない、ということだった。遅かれ早かれ、金がこの仕組みに信用の製造法を教え込む。

今日、ある人物が暴かれた。
彼女は小説を盗んだのではない。
それを語る言葉を盗んだのだ。

ひとりの女が本を出す。初めての恋愛小説だという。動画の中で、ほとんど涙ぐみながら、視聴者に語る。

「自分で書きました。AIには直すのを手伝ってもらっただけです。アイデアはすべて私のものでした」

人々は彼女を信じる。
拍手を送る。
それから、「直す」がまるで別のことを意味していたと知る。
人工知能は読点を直したのではなかった。
本を書いたのだ。
彼女が書いたのは依頼文だった。

私自身の道は、宣伝のために築かれたものではなかった。もっとずっと魅力に乏しいもののために築かれた。自分が描くものの代価を、全額払うことだ。

本物の会社の中での18年。
人工知能が膨らませたアイデアではなく、私より先にすでに自分の40年を投じていた父によって膨らんだ人生。

書く人間と、書かせる人間を分けるものは何か。
技術ではない。
技術はただの道具で、1950年代のタイプライターと何も変わらない。本当の違い

は、言葉の背後に体があるかどうかだ。

言葉が描くものをくぐり抜けてきた体。

一文一文を、歳月と、過ちと、規律と、犠牲と、勝利と、敗北で支払ってきた体。

彼女の本は愛の約束として売られている。

保証付きの成功。

最古の宣伝の形は、いつだって同じだったからだ。

欺き。

人はめったにそれと気づかない。

ただ魅了されてしまう。

だからこそ、私のナラティブは別のスローガンを掲げている。

「あとで払えばいいと信じていた者たちに、時が差し出す請求書」

私は決して有名にはならない。

決して金持ちにもならない。

だが、忘れることのできない存在になる。

フェルディナンド・フレーガ